

〔大島特産園芸作物における生産振興技術対策〕
地域特産野菜および花き観葉植物の病害虫管理
～ツバキを食害するエダシヤク類等の利島，大島における発生推移～
澁澤直恵・奈良雅代*・森 優美*・加藤綾奈*²
(島しょセ大島・*大島支庁産業課・*²生産環境科)

【要 約】2019年春の幼虫発生密度は，ハスオビエダシヤク，トビモンオオエダシヤクともに4年連続で低減し，利島のエダシヤク類の大発生は現在終息している。大島においてもエダシヤク類の発生は少なかったが，一方でチャドクガの多発生が認められた。

【目 的】

大島管内のツバキは国内でも最大規模の油糧生産があり，切り枝出荷，観光資源等としても重要品目となっている。エダシヤク類の幼虫は伊豆諸島で過去に大発生し，利島では1972年，2001年，2015年など周期的に大きな被害が出ている。大島においても被害を未然に防ぐため，大島町からツバキ害虫の幼虫密度調査の協力要請を受けている。このため，大島支庁，利島村などと協力して発生量等を定期的に調査し，計画的な防除対策に活用する。

【方 法】

幼虫の発生量調査：2019年5月9日に，利島村内12地点，大島町内10地点においてエダシヤク類幼虫の発生密度を時間単位採取法により調査した（図1）。大島町内においてはエダシヤク類幼虫の発生調査と併せて，園芸植物害虫でもあるチャドクガ幼虫のコロニー密度についても調査した。なお，時間単位採集法とは，各調査地点において5分間，調査員が椿林内で幼虫を採集し，種ごとに採集数を記録するものであり，その合計採集数を人数と時間で除したものを発生密度とする。

【成果の概要】

1. 利島におけるハスオビエダシヤクの幼虫発生密度（採集数/分/人）は，2013～2015年にかけて増加したが，2016年は0.41と減少に転じ，2019年は0.00であった（図2）。トビモンオオエダシヤクについても同様に増加したが，2016年から0.80と減少に転じ，2019年は0.10とさらに減少した。
2. 大島では2014年にハスオビエダシヤク，トビモンオオエダシヤクの幼虫発生密度が増加したが，2019年の調査ではそれぞれ0.00，0.04と低密度であった（図3）。一方，2019年のチャドクガ幼虫のコロニー密度は0.26であり，2013年に次ぐ高い密度であった。

【残された課題・成果の活用・留意点】

2013年以降の利島でのエダシヤク類の大発生は終息期を迎えたが，再度の大発生期に速やかな初動体制をとるため，発生量調査は長期・継続的に実施する必要がある。大島でもエダシヤク類については今年度は薬剤散布が必要な発生密度には至らなかったが，チャドクガについては発生が多かったため，大島町により複数回の農薬散布が行われた。薬剤散布の実施の判断のため，今後も本密度調査を継続していくことが重要である。

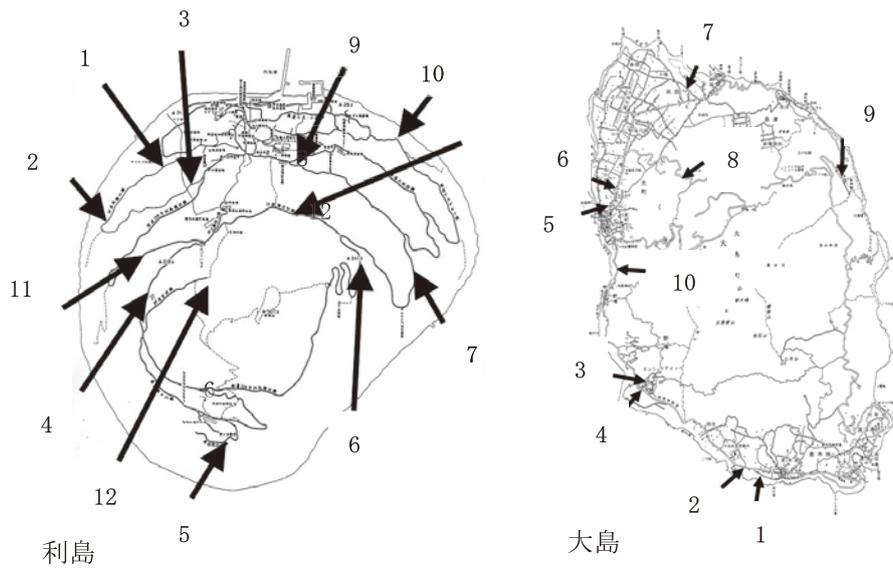


図1 調査地点

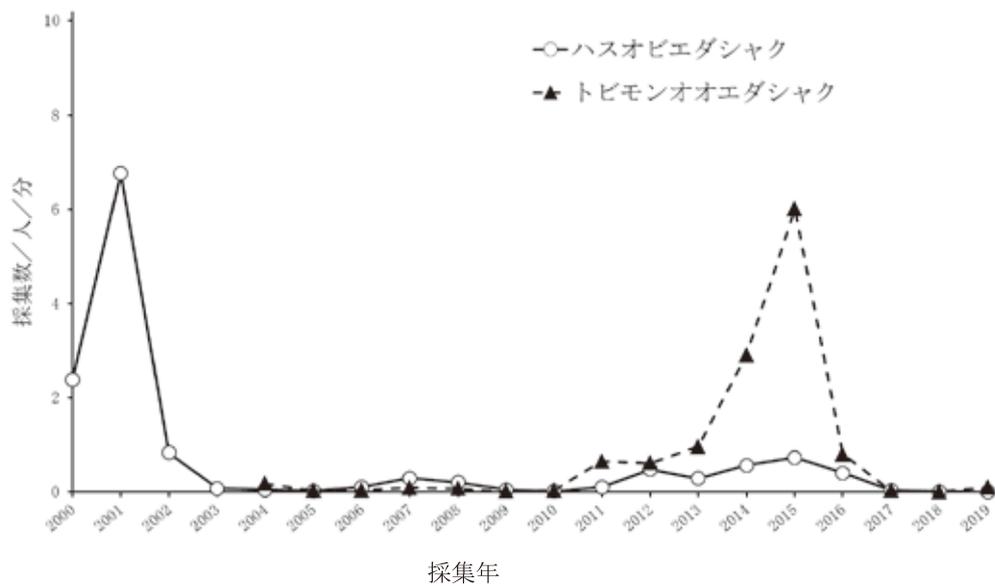


図2 利島におけるハスオビエダシャクとトビモンオオエダシャク幼虫の発生密度推移

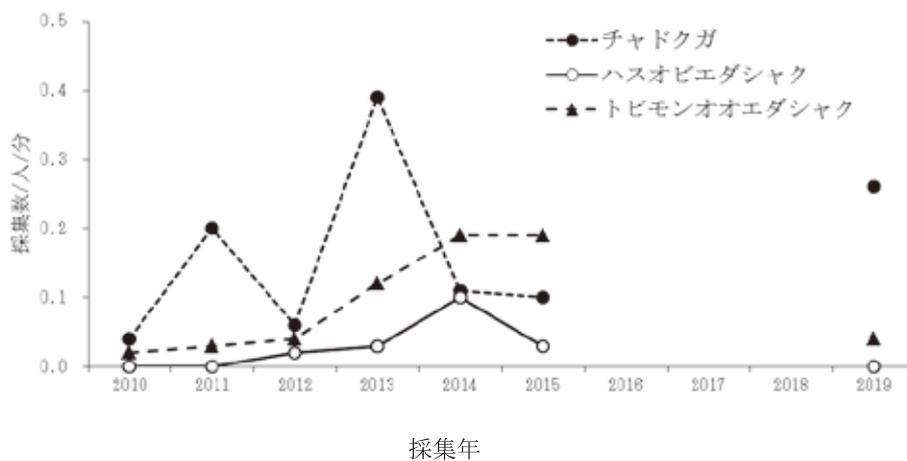


図3 大島におけるチャドクガ，ハスオビエダシャク，トビモンオオエダシャク幼虫の発生密度推移